
【巻頭言】

運動疫学研究の範囲を考える

川久保 清¹⁾

1) 共立女子大学家政学部

研究会誌である「運動疫学研究」の発行が年2回となって2年目を迎え、内容も充実し、原著論文の投稿数も徐々に増えつつある。これは、編集委員長の井上茂先生のご尽力の賜物と思います。熱心な推進者がいなければ何事も進まない例です。

さて、運動疫学研究がカバーする範囲はどのような領域と考えられるか？ 今年に入り、「Physical Activity and Health 2nd ed」(editors; Bouchard C, Blair SN, Haskell WL, Human Kinetics, 2012)を目にする機会があり、その目次を紹介しながら最近の傾向を考えてみたい。運動疫学研究会誌に投稿を目指す研究者の方に少しでも参考になればと思う。

Part I 「身体活動と健康に関する研究の歴史と現状」は、1. 何故身体活動と健康に関する研究が必要か？ 2. 身体活動・体力・健康に関する歴史的展望、3. 身体活動と体力の年齢、性、人種による差、4. 座業的行動と不活動の生理学、の4章からなる。3のような記述疫学的研究も大事である。また、最近では身体不活動のほうに関心が高まっているのが分かる。

Part II 「身体活動の臓器に及ぼす影響」は、5章からなり、身体活動の急性、慢性適応が述べられているので、運動疫学研究者が知っておくべき内容であるが、研究の範囲からははずれる。

Part III 「身体活動、体力と健康」は、10. 身体活動、体力と死亡率、11. 身体活動、体力と心、血管、肺疾患、12. 身体活動、体力と肥満、13. 身体活動、体力と糖尿病、14. 身体活動、体力とがん、15. 身体活動、体力と骨・関節疾患、16. 身体活動、筋力と健康、17. 身体活動、体力と子供、18. 身体活動の危険性、の9章からなり、身体活動と疫学に関連するほぼすべての疾患が網羅されているが、今後の運動疫学研究で求められるのは「がん」に関するものである。18章は、運動の急性・慢性障害であり、どちらかというと臨床スポーツ医学の領域ではあるが、運動疫学研究でもとりあげたい研究テーマである。

Part IV 「身体活動、体力と加齢、脳機能」は、19. 身体活動と加齢、20. 身体活動と脳機能、21. 運動と精神健康に及ぼす影響、の3章からなり、比較的新しい分野であり、超高齢社会の日本にとっても今後とりあげたい領域である。

Part V 「身体活動量はどれだけ必要か、またそこに到達するにはどうすればよいか？」は、22. 身体活動、体力と健康における量・反応関係、23. 科学から身体活動ガイドラインへ、の2章からなる。身体活動と健康に関するガイドラインは種々に出されているが、日本発のガイドラインが少ないのは否めない。ガイドライン化できるようなエビデンスを発信していくのが運動疫学研究の目的である。運動疫学研究会初代会長の下光先生は、平成24年度より日本体力医学会の理事長になられ、新たにガイドライン検討委員会を作り、私が委員長を拝命しました。これから井上茂副委員長とともにガイドラインを検討していくことになるので、運動疫学研究会諸子のご協力を願う次第です。

Part VI 「新しい挑戦と可能性」は、24. 身体活動、体力と健康における遺伝的差異、25. 身体活動、体力と健康の総括、の2章からなる。遺伝的な運動疫学研究は少ないが、興味がある。

運動疫学研究も今年度は14巻を数える。歴史的な流れをふまえ、今後の総括が必要な時期にきているのかも知れない。